



コンサルタントの地位の向上を願って

東北電力株式会社

取締役土木部長 阿部 壽

去る5月30日、私共の会社の土木部野球愛好者大会が、松島町町営グラウンドで例年通り賑やかに開催された。北は青森から南は上越市やいわき市までの全土木部関係者の1/3にのぼる14チーム約200名の人々が参加した。年令的にも10代から60代（これは私ですが）まで、バラエティに富んだ人々が、朝から一日中野球に取り組んだ。

終了後は、優秀選手の表彰から始って、地元宮城支店の大漁唄込みの披露を交えて、親睦を深め大変意義のある一日を過ごすことが出来た。結婚式などで選手が不足したことから、私も一試合プレーをさせて貰ったが、一年のうちで最も待遠しくて楽しい一日であり、又来年もという心構えで家路についた。（今でも時々バッティング練習はしている）

振り返ってみると、本大会もすでに8回目となって、この種の催しは社内でも例が少ないので、それなりの評価も得ているようである。最初は昭和60年に新仙台火力のグラウンドを借りて行われたが、参加チームも4チームと少なく、ケガをしたらどうしようかとか、交通事故があったらどうしようかなどということばかり気にしながら始められたことを考えると、現在の風潮は誠に有難いもので、今年は東北電力新聞の紙面も飾ることができた。2回目からは、参加チームも増え、場所も岩手県雫石町、福島県安達町、そして平成元年には山形県山辺町と段々と広がって今日の姿を迎えたのである。

このように書くと何の変哲もないが、実は会場がこのように広がっていったのは、東北自動車道の整備の進み方と一致しているのである。残念ながら、まだ秋田や新潟で大会を開くことは出来ないが、更に自動車道の整備が進めば、やがて、この大会も日本海側で開催される日もそう遠いことではないと皆んな楽しみにしている。

このような例を長々とあげなくても、東北自動車道や新幹線などが、特に地域の人々に与えている恩恵は計り知れないものがあり、有難さを身にしみて感じているのはよく耳にする話である。

このように完成した施設への評価は誰しも一様に認めるところであるが、一方作った人

への評価はどうであろうか。土木技術者であるという点で、我々の仲間とも言える沢山の工事関係者にきいてみても、「貴方達の為に」とか、「貴方達がやってくれたから」等という感謝の言葉を聞いたり、尊敬の目で見られたなどという話は、残念ながらあまり聞いたことがない。まして、これらの仕事のいわば縁の下の力持的存在である、コンサルタントの方々に対する評価などは、一層少いのではないかと思われる。

一般的な工事についても、発注者側から感謝状を受ける機会も、ゼネコンの方々などに比べると相当に少ないのではないかと思われる。

21世紀は東北の世紀であるということは、毎日のように見聞きする言葉であるし、是非そうなるよう、皆んなで努力していく必要がある。しかし、これを実現するには、東北自動車道や東北新幹線のような工事の何倍かの工事を実施する必要がある。

また今までのように経済性や効率を優先した施設ではなく、人間工学や芸術性を重視した、ゆとりのある施設を作っていくように方針も転換されていくことになるだろう。同時に発注者側の業務の合理化が更に推進され、調査や設計業務が外注される傾向が一層強くなるものと思われる。

その意味でコンサルタントの方々の果す役割が、今迄よりはるかに大きくなると思われる。この期待に応えていくためには、コンサルタントは、もっと周りから尊敬され、信頼されるべきであると思うが如何であろうか。

そのためにはどんな心構えで仕事に取り組んでいくことが必要だろうかという点について、私見を述べさせて頂きたい。

まず何んと言っても第1には、技術者としてプライドを持って仕事をする必要があるのではないだろうか。どのようにすればプライドを持てるかは、人それぞれ異なると思うが、基本はやっぱり立派な報告書を書くことだろう。発注者が調査を依頼する時には、そこに何を作る予定なのか決まっている訳であるから、発注者の意図を十分に汲み取った報告書を書く必要がある。そのためには、自分の専門分野は勿論であるが構造物が完成するまでの一連の業務を良く理解していなければならない。又他人から尊敬を受けるためには、まず仲間が評価する必要がある。その意味では立派な仕事を協会が積極的に表彰する必要がある。これもうっかりすると、規模や工事費が大きいものが優先されがちなので、小さな仕事にも忘れずに光をあてる必要があるだろう。

次には、もっと判り易い報告書を書く必要があると思う。私は割と報告書をよく読む方であるが、文章と図面が合わないケースや沢山の試験項目があるのに、まとめでは全くふ

れていない報告書もたまにはある。又、まとめや結論を読んでも、どのように実務に活かしたらよいか判らないものも時には見受けられる。最近では発注者側にも報告書を読まないような人もいるが、判りにくい報告書があるということと無縁ではないようにも思える。

判り易い報告書が提出され、それを発注者がよく読んで、お互いが気持ちよく仕事をすることによって、信頼感が生れれば、コンサルタントの地位も自ら向上すると思うがどうであろうか。

3番目は、一口で言えば責任を持って仕事をして頂きたいということになるろうか。発注に当っては、発注者側はこのような構造物を作るということを一応説明する筈なので、この点をよく理解して調査の進捗に対応して、試験内容を工事の目的にマッチしたものとするよう積極的な進言をしてほしい。現場の仕事が終って何ヶ月も過ぎてから、報告書が提出された時に又同じような調査をしなければならぬのではまずいし、発注者が示した調査計画に忠実なあまりに、大事なことが報告書に漏れているのでは、尚更信頼感を失うことになる。勿論発注者との話し合いの下にはあるが、発注者がどんな頼み方をしても、調査が終了した時は必要にして十分なデータが集まっているようなアドバイスがほしいのである。

4番目はこれはいろいろ意見の分れるところと思うが、発注者が調査を依頼するのは、施工計画をどのように立てるか、施工管理はどうするか、設計はどうするかを決めるためであるから、必らずこのことをまとめの中で言及して貰いたいのである。理由は簡単である。もしこのことを頭に置かないで、調査のみをやるのであれば、3番目に述べたように実務に役立つような調査は実施できないし、期末試験のない学生のようなもので技術者としての成長は望めない。それはコンサルタントではなく、単なる試験屋でしかない。発注者や施工者がコンサルタントの意見で制約を受けるということも考えられなくはないが、発注者も施工者も同じ技術者である。万が一、適切でない報告があったとしても、それを見抜く眼力は持っているし、持たないためにトラブルがあればやがて持つようになる筈である。3者で議論を戦わせてこそお互い技術の向上があるし、それぞれそのくらいの度量は発注者にもあると信じている。

もっといろいろ考えはあるが、最も手取り早く業界の地位向上をはかるためには、相撲でも、野球でも同じことであるが、若花田や貴花田のようなスターが必要なのである。スターを生み出す努力はどこの業界でもあまりなされていないとは思えないが如何であろうか。本当に地位の向上を計りたかったら、この位いの努力は何んでもないと思うのだが。

最後に発注者としてやりたいと考えていることを、少し述べさせて頂きたい。

1つは、報告書をよく読んで、必要ならどんどん、クレームをつけることである。よい報告書が出来ないとすれば、その責任の半分は報告書を読まない発注者にある。

2つはコンサルタントの努力を発注者として卒直に評価することである。その意味ではおこがましいが、感謝状などもできるだけおあげしたいし、仕事に対する評価も役割の変化に応じて考えていくべきだと考えている。

3つ目は、従来から報告書の読み方を重点項目として社員教育の中でも取上げているが、更に昨年、「どうしたら読み易い報告書を作って頂けるか」をテーマとして、コンサルタントの方々と、かなり突込んだ意見交換を続けており、そのために発注者としてなすべきことはすみやかに改善することとしている。

コンサルタントの方々の、今後のご健闘と一層の地位の向上を願ってこの稿を終らせて頂きたい。

